囃子

能管(笛)、小鼓、大鼓、太鼓の四つで構成され、四拍子と呼ばれています。能の囃子は、三つの打楽器に加え旋律楽器の能管もリズム主体の演奏を行います。単なる伴奏ではなく、役者と対等にわたりあい、緊張感のある舞台を作りあげる重要な音楽です。

笛

大鼓

小鼓

太鼓

能面

能面にはとても重要な働きがあります。種類は約60種類と言われ、この世の存在ではない鬼神や怨霊などの役柄の面の他、さまざまな年齢層の女性の面が多くありますが、これは男性の役者が、女性の年齢に応じた美しさを演じるためだと考えられています。

小面

深井

三日月

顰

猩々

般若

扇

扇には二つの種類があります。

「鎮め扇」は通常使うものです。「中啓」は親骨が要よりも外側に反った形をしており、折りたたんだ時上端が広がります。扇には様々な装飾が描かれています。

神扇

修羅扇

蜑扇

狂女扇

鬼扇

能装束

能装束は能の精神性と内容を視覚的に表現しています。絹を主な素材とし、多くの装束は重厚な仕立てになっています。精巧で複雑な文様や色調があり、多様性があります。

唐織

厚板

狩衣

長絹

鶴亀座
カンボジア 能楽体験教室

2018年2月21日（水）

会場　タ・プロームホテル
シェムリアップ

NPO法人 能楽普及集団
鶴亀座

能楽とは

笛や鼓による伴奏と、地謡と呼ばれるコーラス隊の謡（歌）に合わせて、舞台上の役者が舞いながら古典文学を題材とした物語を進めて行く演劇です。役者は装束を着けて、主役は主に能面をかけています。
能楽は、約６５０年前に日本で創られ、ユネスコの世界無形文化遺産となっています。

素謡

能一曲の台本を、囃子や舞は入れずに、謡い手全員が舞台上で正座して謡う形をとります。謡は、物語のセリフに節（音程）と拍子（リズム）をつけて謡ったり、語ったりします。

仕舞

能一曲の見せ場となる部分を、能面、能装束、囃子を伴わずに、舞い手と数人の地謡のみで行います。紋付きと、はかまを着用します。

舞囃子

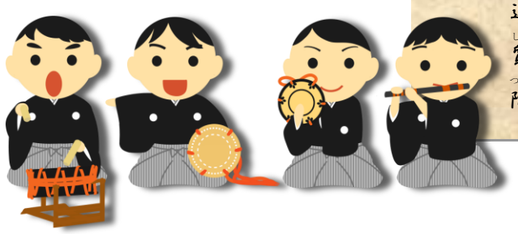
能一曲の見せ場となる部分を、舞い手、地謡、囃子方が披露するもので、能面、能装束は付けずに紋付きと、はかまを着用します。

附祝言

一日の公演を終える際に、おめでたい謡を謡うことでその日の締めくくりとするもの。

本日の番組

連吟	四海波
あいさつ	
解説	能について
仕舞	玄象、橋弁慶
素謡・仕舞	清経
舞囃子	吉野天人
体験学習	四拍子紹介
	小鼓、太鼓、笛、能面
舞囃子	羽衣
連吟・仕舞	土蜘蛛
質疑応答	
附祝言	猩々



曲目の紹介（あらすじ）

玄象

時（１０世紀）の大臣藤原師長は、琵琶の名手を求めて中国に旅立つ。旅の途中、月を見るために須磨の浦（兵庫県）で老夫婦に一夜の宿を借りた。宿を借りた主人の求めに応じて琵琶を弾いていると、突然雨が降り出した。主人は、静かに聴くために屋根に茅をひいた。師長は老夫婦が、琵琶の心得のある者と思い、一曲を所望する。老夫婦は師長の中国へ行くことを断念させるための一心で、玄象といわれる名器の琵琶と琴で合奏を始めた。演奏後老夫婦は、実は自分たちは村上天皇と梨壷王妃であると正体を明らかにして消え失せた。村上天皇が再登場、竜神に命じて琵琶の名器獅子丸を竜宮から持って来させ師長に授ける。師長は獅子丸の琵琶を携えて帰途につく。

橋弁慶

弁慶（僧）は、祈願のため早朝に五条（京都）の天神に参詣しようと思っていた。ところが、従者から夜に五条の橋に人斬りが出るので、止めるよう進言されます。いったんは思いとどまった弁慶ですが、人斬りを退治することを決意し、夜を待ちます。弁慶が五条の橋へ行くと、牛若丸（後に武将として知られる義経）が女装をして待ち構えていました。女だからとやり過ごそうとする弁慶に、牛若丸が斬りかかります。弁慶は応戦しましたがついに敗けて降参します。そして二人は主従の誓いを行いました。

清経

平家の武将平清経が、柳ヶ浦（福岡・大分県）にて戦に敗けて入水した。家臣の粟津三郎が、形見の品である遺髪をもって清経の妻のもとへやって来ます。妻は悲嘆にくれますが、再会の約束を果さなかった夫を恨み、遺髪を返させました。清経の亡霊が現れ、遺髪を返納した妻の薄情を恨み、平家一門の敗戦の戦いの様子を語ります。最後に、清経は念仏によって救われるのでした。

吉野天人

吉野（奈良県）の桜を見ようと連れだって来た人たち。満開の桜の山に分け入ると、花を友としている気品ある女性に会います。立ち去る前に、その女性は、自分は天人であることを明かします。その後、天人は戻って来て、花に戯れるかのように美しく舞い、姿を消しました。

羽衣

ある春の日、漁師が三保（静岡県）の松原を通りかかると、松の木に世にも見事な羽衣が掛っています。持ち帰って家の宝にしようと漁師は思いました。そこへ天女が現れ、それは私のものだから返して欲しいと言います。漁師は、はじめこそこそこばんでいましたが、その羽衣がないと天に帰れないとなげく天女の姿に打たれ、衣を返すことにしました。羽衣を返す代わりに、天人の舞を見せてほしいと言うと、天女は喜んで引き受けます。衣を受けとって、天地を祝福するかのような美しい舞を舞うと、天女は月の都に帰って行きます。

土蜘蛛

重い病に悩む武将の源頼光のもとに、侍女（世話する女）の胡蝶が薬を届けた。その夜、伏せる頼光の枕辺に、見知らぬ僧が訪ねます。頼光の容態をうかがう僧はその正体を怪しまれた途端に千筋の糸を投げかけ、化け物（土蜘蛛の精）の本性を現します。頼光も枕元にあった刀を手に取って斬りつけますが、化け物は姿を消してしまいます。そこに駆けつけた独武者は、頼光から話のいきさつを聞いて、残された血の跡をたどって、化け物退治に向かうこととなります。